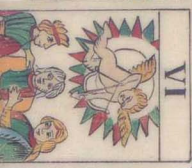


密室殺人が多すぎる

七つの棺

折原



検 印
廃 止

著者紹介 1951年埼玉県久喜市に生まれ、白岡町に育つ。早稲田大学第一文学部卒業。日本交通公社に勤務し、〈旅〉誌の編集者を経て、1988年5月本書の原型『五つの棺』を上梓、文筆活動に入る。著書に『倒錯の死角』『倒錯のロンド』他多数。

七つの棺

密室殺人が多すぎる

1992年11月27日 初版

著 者 折 原 いち
一

発行所 (株) 東京創元社

代表者 平 松 一 郎

(162) 東京都新宿区新小川町 1-5

電 話 03・3268・8231-営業部

03・3268・8204-編集部

振 替 東 京 6-1565

曉 印 刷・本 間 製 本

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社までご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

© 折原一 1988, 89, 90, 92 Printed in Japan

ISBN4-488-40901-6 C0193

密室殺人が多すぎる

七つの棺

折原 一



処理済

創元推理文庫

9

I313. 45
J6932

ISBN4-488-40901-6

C0193 P630E

定価 630円 (本体612円)



1910193006309

「いまだき密室殺人の推理小説なんて、恐竜の化石みたいなものじゃないか」——という声が聞えそうだが、(中略) 密室殺人が、モダンな装いで現代に生きていることが証明されて、驚き、かつ嬉しくなること請合いだ。その上パロディの面白さまでおまけがついているのだから楽しい。白岡町がライツビルや、セント・メアリー・ミードのように有名になる日が待ち遠しい。

小池滋

創元 推理 文庫

七 つ の 棺

密室殺人が多すぎる

折 原 一

目次

密室の王者

九

デイクスン・カーを読んだ男たち

五一

やくざな密室

九四

懐かしい密室

一五七

脇本陣殺人事件

二四七

不透明な密室

三八

天外消失事件

三五六

文庫版あとがき

四一九

密室——その不思議な魔力

山前 譲

四三三

THE SEVEN COFFINS

Too Many Locked Room Murders

by

Ichi Orihara

1988, 89, 90, 92

七つの棺

密室殺人が多すぎる

密室の王者

No Smoking in the Locked Room

1

「ひがしー、時任山、ときとうやま」

「にーしー、鶴乃海、つるのうみ」

呼び出しの声に、東西から白いまわしをつけた二人の大型力士がゆっくり腰を上げ、即席の土俵に上った。会場中にとよめきがおこり、拍手が割れんばかりに鳴り響いた。

東は白岡東口商店会の若草団子店の若主人、時任健一ときとうけんいちこと時任山、三十四歳。〃団子屋のケンちゃん〃の愛称で親しまれている。身長百七十五センチ、体重百キロ。丸顔でスポーツ刈り、どちらかというとアンコ型の力士である。

一方の西方、鶴乃海。名前は佐藤博さとうひろしというが、三十五歳という年齢にもかかわらず、頭がツルツルに禿はげ上がっているので、単純明快に鶴乃海の四股名しこなをつけている。佐藤クリーニング

店の主人で、白岡西口商店会の青年会長。時任山とは対照的に、ボディビルで鍛えたような筋肉質の体で、よく引き締まっている。身長百八十センチ、体重九十キロ。

時任山を大乃国タイプとするなら、鶴乃海は千代の富士タイプだろう。

白岡では、十年来、東西の商店会共催の「町民相撲大会」を開いているが、ここ数年はいつも最後にこの二人が勝ち残り、対決するのであった。他の選手は全く勝負にならなかった。これまでの戦績は、鶴乃海の四勝一敗で、圧倒的に鶴乃海に分がある。

体力にものをいわせての突っ張り専門の時任山に、腕力と技巧の鶴乃海。短期勝負だったら前者だが、接近戦、長期勝負となると後者が力を発揮するのである。

「よ、ケンちゃん、頑張れよ」

東口商店街の連中の声援を受けて、時任山は顔に一瞬、不敵な笑みを浮かべたが、両手で思いきり頬を叩き、顔を引き締めた。腕をぐるぐるまわし、首を右に左に曲げる。

「鶴ちゃん、空気デブに負けるなよ」

西口商店街の連中も負けてはいない。鶴乃海は緊張の中にも激しい闘志をみなぎらせて、相手をジッとにらんだ。

「ハゲ、引っこめ」

「ばかやろう、のろまの百貫デブ」

ヤジが場内に飛びかう。拍手と怒号がないまぜになって、会場の熱気が息苦しいほど盛り上がった。ここは白岡町民体育館である。

白岡町は東京からJRで一時間、関東平野のド真中にある田舎町である。今でこそ、都会から流入するサラリーマンで人口が増えているが、本質的には田舎町であることに変わりはない。その白岡町民の年一回のお楽しみといえば、五月五日のこどもの日に行われる町民相撲大会なのだ。町内各地区から力自慢の男たちが集まり、力と技の優劣を競う。そもそもは町民同士の親睦を深めるためのものだったが、最近は様変わりしていた。というのは、ずば抜けて強いのが、今これから対戦する二人で、東西の商店会の代表の対決ということから、商店会同士の一騎討ちの構図ができあがってしまったのである。

もともと、東北線の線路を挟んで、何事においても張り合っている商店会同士だったから、たとえ相撲の試合でも、応援合戦にも熱がこもる。互いの中傷、誹謗ひばうが大会が近づくにつれ、エスカレートし、決勝戦でピークを迎えるのだった。

今も皆、酒をたっぷり飲んでいるから、気が大きくなっていて、中には酔ったあげく、つかみあいの喧嘩をしている連中もいた。空の一升瓶があたりには散乱している。

体育館は縦百メートル、横五十メートルほどの大きさで、高さは七、八メートルはあるだろう。ふだんはママさんバレーの練習などに使われているが、今日は、中央に特設の土俵が置かれ、それを囲んで、二百人ほどの観衆がむしろの上で観戦していた。行司は白岡北高校の体育教師で、紺のジャージ姿がいかにも田舎っぽく、間が抜けている。

制限時間いっぱいになり、拍手と声援が、体育館全体に割れんばかりに反響した。「待ったなし」

行司が言い、両者が土俵中央の白線に手をつき、にらみ合った。この日のために筋力トレーニングに励んだ時任山、脂肪太りの肌がブルルと震える。一方の鶴乃海は腰にぐいと力を入れ、スリムな褐色の尻を高く突き上げた。二人の肌には早くも汗が浮かんでいる。

行司の手が上げられ、両者同時に立った。時任山はウォーと雄叫びを上げると、激しく突っ張り、鶴乃海の頬を思いきりバチンと張った。この素早い先制攻撃で、鶴乃海の体が、立ちぐらみのためか、ぐらりと揺れ、前に落ちそうになった。

「汚ねえぞ、デブ。ボクシングやってんじゃねえんだ」

ノッポの鶴乃海は、時任山の勢いにそのまま一気に押されたが、時任山のまわしに手を引っかけ、かろうじて土俵際に踏みとどまった。

会場中にどよめきがおこる。すべての者が熱戦を固唾をのんで見守っていた。

「よし、行け、鶴ちゃん」

鶴乃海に声がかかる。戦いの場は土俵の中央に移り、両者ガップリと四つになった。こうなると、鶴乃海に分がいい。彼の得意技は右上手投げだ。腕力と握力の強さで、重い時任山の体をゆさぶる。しかし、時任山もよく耐えた。

いい勝負だった。野太い声と黄色い声がまじり合って、場内は異様な興奮に包まれていた。形勢はやがて鶴乃海に傾いてきた。時間が長引けば、アンコ型のほうが不利だ。体力を消耗した時任山は息をあげがせ、苦しそうな顔つきになってきた。

「ケンちゃん、顎を引け」

ところが、敗色濃厚の時任山の足が俵にかかった瞬間、どうしたことか、有利に見えた鶴乃海の様子がわかにおかしくなってきた。脂汗が額に浮き出し、腰のたが弱くなったのだ。禿げた頭が照明にギラギラと光っている。

形勢が変わったとみるや、時任山が今度は間髪を入れず、まわしを切り、大きな右手を鶴乃海の右頬に炸裂させた。

すると、どうだろう。鶴乃海が腰からグラッと崩れ、土俵の中央に呆気なく仰向けに倒れたのである。見ていて、異様な崩れ方だった。体に突然の変調を来たし、それが腰の崩れにつながったという印象だった。

鶴乃海はびくりとも動かなくなった。西口商店会の若い者が何人か慌てて土俵に上がり、助けおこすが、鶴乃海の目はうつろで、土俵下に運ばれて、うちわであおいでも、身じろぎもせず、横たわっているだけだった。

時任山が勝ち名乗りを受けると、東口商店会の連中の間から、一斉に万歳がおこった。時任山は得意そうに満面笑みを浮かべ、右手でガッツポーズを作った。

2

午後五時、黒星警部は白岡署の捜査一係にいたが、竹内正浩刑事が一大事ですと言って駆けつけてくると、デスクの書類から目を上げた。

「相撲大会で、何か問題があったのか」

「それが大ありですよ」

竹内は色白の頬を紅潮させて言った。竹内は入署三年目、二十五歳の若い刑事である。身長も百七十センチあるし、顔立ちも悪くない。童顔で母性本能をくすぐるタイプなのだが、それでいて女にもてたという話を聞かないのは、落ち着きがないせいだろう。

「負けた鶴乃海が薬を盛られたという話です」

「死んだのか？」

「いえ、すぐ息を吹き返しましたがけど、問題なのは、鶴乃海が試合の前に何かを飲まされたと言ってるんですよ。試合中に急に腹が痛み出して、力が出なくて負けたんだって」

「悪いもの食って、あたったんじゃないの。入院したのか？」

「いいえ、トイレで出すものを出したら、すぐ治ってしまったようです」

「じゃあ、別に、問題ないじゃないか」

「いや、その後が問題でして……」

「ほっとけ、ほっとけ、どうせ商店会同士の喧嘩だろう。相撲大会くらいでもめるなんて、大人げない奴らだ」

黒星警部は田舎者同士のいざござには無関心である。こんな田舎にいと、めったに事件にめぐり合わない。

「ああ、どうして俺はいつまでもこんなところに……」

黒星警部は一応は一流大学出で、エリート・コースに乗るはずだったが、熱烈な推理小説好きが災いして、失敗を重ねてきた。例えば、簡単至極な事件なのに意外な人物を犯人と指摘したり、何の変哲もない部屋を密室に仕立てたりして、過去数々の簡単な事件を闇に葬ってきたのである。そのため、「迷宮警部」と陰口を叩かれ、白岡という片田舎の小さな警察署で、いつまでもうだつの上がらぬまま、警部職に甘んじているのだった。

白岡署の管内では、事件といえば、交通事故がいいところ、窃盗事件にしても、年に数回ある程度だった。客観的に見れば、警部のため、いや住民のためには、むしろそのほうがよかったのだが、彼自身としては実力の発揮できる場がないと、日々悶々と過ごしていた。

本名、黒星光^{ひめろ}。三十八歳。身長百八十センチに近い大男で、鬼瓦のようなごつい顔をしている。当然、女にもてるわけがなく、未だに独身である。

「それでですね」

竹内が言った。「西口の連中が、東口に殴りこみをかけると息まいているんです。一騒動ありそうな気配ですよ」

「ほう、それは大変だ」

黒星は不可能犯罪以外は興味がなかったが、上司としての責任感から、

「じゃ、おまえ、行って、見張ってろ」

とだけ言うておいた。

「つまらない事件だと、いつもこれなんですからね。いいですよ、もう頼みません」